

サトイモ培養苗の生産特性

齋藤謙二・広野直芳*・阿部清**

(山形県農林水産部生産流通課・*山形県立園芸試験場・**山形県農業研究研修センター)

Productive Characteristics of Taro (*Colocasia esculenta*(L.)) Plant Derived from Shoot Tip Culuture

Kenji SAITO, Naoyoshi HIRONO, and Kiyoshi ABE

Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station・*Yamagata Agriculture, Forestry and Fisheries
Department Produce Distribution Division・**Yamagata Agricultural Research and Training Center

1. はじめに

山形園試では、平成5年に、サトイモについて茎頂培養による大量増殖法を確立し、生産振興の一役を担っている。この培養苗は、慣行の種芋苗区に比較すると、①地上部の生育がコンパクトで、草丈、葉の大きさとも小さい、②一次芋の着生時期が種芋苗区より早く、多収である、③商品性の高い丸芋が多い、④ウイルスフリー苗であるため、収量や品質の低下を招くサトイモモザイクウイルス等に感染していない、等の特徴が判明している。

ここでは、培養苗の芋の着生と肥大時期、及び培養苗の肥大特性に適しかつ省力的な施肥法を検討したので、報告する。

2. 試験方法

試験1 塊茎着生・肥大の解明

(1) 試験区の構成および栽培の概要

茎頂から増殖培養により形成したシュート塊を1シュートごとに分割したものを2月10日に72穴セルトレイで発根馴化を行ったものを培養苗区とした。さらに4月6日に50穴セルトレイに鉢上げ育苗を行ったものを二次育苗区とした。また、種芋苗は、4月17日から25℃で催芽処理を行ったものを用いた。これらの種類の苗について5月10日に定植し、収穫は9月6日に行った。栽植距離は、うね幅120cm、株間30cm、1条植えとした。供試系統は全て「土垂系」を用いた。

試験2 施肥法の検討

(1)

行施肥法) よりもやや劣った。化成肥料とシグモイド型肥料の併用区が最も多収となったのは、速効性の化成肥料と7月以降肥料溶出が多くなるシグモイド型肥料の肥効が相乗効果として現れたためであると考えられ、全量基肥の省力施肥として、サトイモ培養苗の早掘り栽培に適することが明らかになった。

4. おわりに

サトイモ培養苗は、取り扱いが簡便、早期多収等、栽培上のメリットは多いが、その特性を十分把握し、種芋苗区と異なった栽培管理が必要である。山形園試では、培養苗の子芋着生時期が早まる要因について、更に解明する予定である。

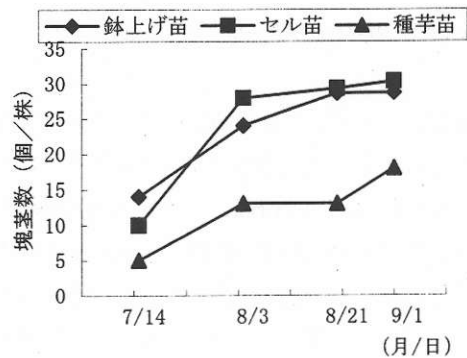


図1 着生塊茎数の推移

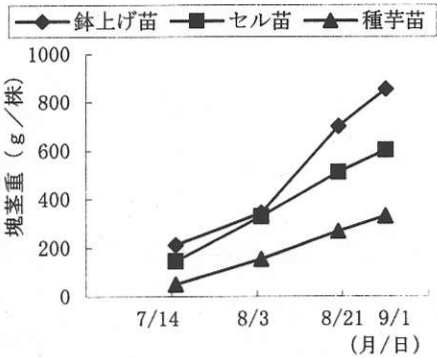


図2 着生塊茎重量の推移